

JELA NEWS

ジェラニュース 第52号 2020年8月15日発行 発行責任者 渡辺 薫

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



私たちにできること、それは「伝える」こと

この号にはこんな記事が…

【P2】JELA と UNHCR の提携事業「RVEP (難民専門学校教育プログラム)」開始／ UNHCR 駐日事務所 カレン・ファルカス駐日代表の寄稿文 【P3】新型コロナウイルス緊急支援：インド・カンボジアへ手作りマスクを寄付 【P4-5】難民支援ボランティア「文化や価値観は違う、それらを超えて親しくなれる！」塩野かなで／ 2021 年インド・ワークキャンプ(IWC)中止のお知らせ／インド CRHP 緊急支援呼び掛け 【P6-7】2020 年カンボジア・ワークキャンプ(CWC)感想文一覧 【P8】JELA 公式 SNS アカウント開設のお知らせ／川柳ひろば／支援者一覧／編集後記

JELA・UNHCR提携事業 在日難民の専門学校進学を支援 RVEP (Refugee Vocational Education Programme)がスタート



JELA と UNHCR (The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees =国連難民高等弁務官駐日事務所、カレン・ファルカス駐日代表) は、2020 年 5 月 20 日に「Respect to the Joint Implementation of the Refugee Vocational Education Programme (難民専門学校教育プログラム)=RVEP」の協定書を締結しました。新型コロナウイルス禍の影響により、対面での式典は実施できませんでしたが、インターネットを使って両代表者顔合わせと事業提携の契約を締結しました。

RVEP は、経済的な理由で専門学校への進学を断念せざるを得ない難民の方の進学支援を行うものです。日本国内では、2020 年 4 月から「高等教育の修学支援新制度」という文部科学省の実施する進学支援が始まり、大学、短期大学、高等専門学校、専門学校に進学する道が広く開かれました。そこで、JELA は UNHCR と提携して、すでに UNHCR

が実施している大学や大学院への進学支援を行う「難民高等教育プログラム (Refugee Higher Education Program – RHEP) の「専門学校版」である RVEP の実施へと踏み切りました。UNHCR が難民の方と JELA を結び、JELA は難民の方と専門学校とを結ぶ。そんな役割分担により、難民の方々の専門学校への進学を両団体がサポートしていきます。

JELA は、昨年から、難民の方の関心は必ずしも大学や大学院への進学だけではなく、日本での自立した生活に直結する専門学校への進学へも向けられていることを、UNHCR の専門部署の担当者から聞いていました。着想から一年半、皆さま、どうぞ JELA と UNHCR の RVEP にご期待ください。

今回の JELA と UNHCR の RVEP 事業提携に際して、UNHCR 駐日事務所 カレン・ファルカス駐日代表からご寄稿いただきましたので掲載します。

「RVEP 設立へ寄せて」

UNHCR 駐日事務所

カレン・ファルカス駐日代表

UNHCR は、6 月 20 日の「世界難民の日」に係り、2019 年末時点で、過去最高の 7,950 万人、全人類の 1%以上が故郷を追われていることを発表しました。そのうち、40%が 18 歳未満の子ども、13%が 18 歳から 24 歳の若者です。高等教育を受けている難民の若者の割合が 1%から 3%に上昇した一方で、UNHCR が目指す「15by30」(2030 年までに、15%の難民の若者が高等教育を受けられるようになる)の達成には、更な



UNHCR 駐日事務所
カレン・ファルカス駐日代表

る機会の提供が求められています。このような中、私たちは、難民の若者が、就学や就職の機会の差を埋める最初のステップとなる高等教育を受けることで、再び安定した生活を送り、自身の能力や知識を存分に発揮し、新しい環境で活躍できるようになると考えています。UNHCR は、1951 年の難民条約でも、教育を受けることは基本的人権の大きな柱であると主張しており、また、それは持続可能な開発目標 (SDGs) の目標 4「すべての人に包括かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」とも合致しています。

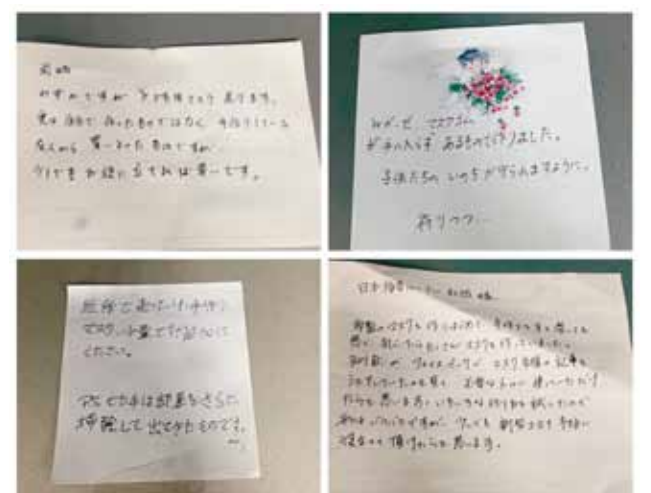
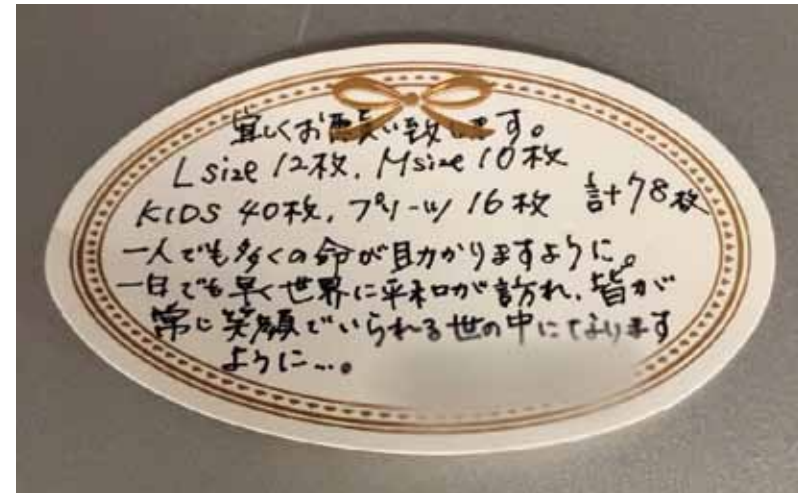
日本の UNHCR は、UNHCR の募金・寄付の公式支援窓口である、国連 UNHCR 協会と、13 校のパートナー大学と共に、RHEP(UNHCR 難民高等教育プログラム)を運営しており、毎年最大 18 名の難民の学生が、学士・修士課程に進んでいます。この度、JELA と共に開始する RVEP(難民専門学校教育プログラム)は、難民の人々が新しいスキルと知識を習得し、新しい社会で生活を送り、活躍する機会を増やすことができるプログラムです。私たちは、JELA と専門学校と共に、この革新的で、難民の人々が安定した生活を送り、より良い未来を描くことができるようになるプログラムに携われることをとても誇りに思っています。

緊急海外子ども支援 新型コロナウイルス対策「手作りマスク」募集に大反響！

新型コロナウイルス (COVID-19) が世界的に大流行し、感染予防のためのマスクが世界的に品不足になっていることを受けて、JELA では 4 月 16 日から 5 月 15 までの 1 か月間、「JELA が支援するインド・カンボジアの子どもたちに手作りマスクを届けよう！」キャンペーンを実施しました。本キャンペーンには、多くの方々がご参加ください、合計 480 枚の手作りマスクが集まりました。

手作りマスクのキャンペーンにご協力ください、皆様、本当にありがとうございました。JELA 事務局の想像を超える反響をいただき、スタッフも大変驚いています。JELA の支援しているインド・カンボジアの貧困地域では、感染症を予防するためにマスクが有効と分かっているにもかかわらず、購入することができない状態です。そのような中であって、全国の皆様のお力を借りてマスクを送ることができたことは、

非常に意味のあることでした。手作りマスクは、輸送手段のあるカンボジアへ第一弾を配送しました。本紙編集の今 (7 月 21 日現在) インドは都市封鎖の関係で荷物をお送りすることができていませんが、配送が可能になり次第、速やかに第二弾として配送します。引き続き、JELA の世界の子ども支援事業へのご理解とご支援をお願いいたします。



難民支援ボランティア

JELA は難民や難民認定申請中の方に JELA(ジェラ)ハウス(難民シェルター)を無償で提供しています。居住者の中には、来日して間もないため日本語が話せない方や、日本語の読み書きを勉強する機会が無かった方もいらっしゃいます。

JELA では、居住者支援の一環として、日本語を学びたい方にボランティアで日本語レッスンをしてくれる方をご紹介します。新型コロナウイルスの影響で、対面でのレッスンが難しくなりましたが、ボランティアの方々がインターネットを使ったレッスンを開始してくれました。ボランティアの方法も新しい時代に入りましたのだと思います。

新型コロナウイルス禍の影響下にありながら、パソコンやスマートホン、オンライン教材を駆使して日本語ボランティアをしてくださっている塩野かなでさんにご寄稿いただきました。

JELA ハウス日本語ボランティア 「文化や価値観は違う、それらを超えて親しくなれる!」



塩野かなで

こんにちは、JELA で日本語ボランティアをやらせて頂いている塩野かなで18歳です。高校三年生の秋頃に JELA ハウスに住む難民への日本語ボランティアを始めました。ボランティアを始めたきっかけは、6月20日に「世界難民の日」に渋谷でたまたま UNHCR のイベントを見かけ、難民について知ったことです。

「難民問題」は世界の他の国で起きているとなんとなく感じていたため、日本でも私の想像以上の難民認定申請の件数があることや、日本で難民認定申請が認められることの厳しさなどについてボランティアや弁護士の方からお話を聞きとても驚きました。その後自分で難民について調べ、自分も何かお手伝いしたいと考えていたところ、JELA でのボランティア活動について知り、日本語を教えるボランティ

アとして働かせて頂くようになりました。

初めてのボランティアの日、電車で、フランス語での自己紹介の練習をしていたことをよく覚えています。英語は得意だったのですが、フランス語は習っていなかったため、日本語を教える時に意思疎通ができないかもしれないととても心配していました。緊張が高まる中、最寄りの駅でもう一人のボランティアの方と合流して、待ち合わせの場所に行きました。

難民の方は私たちよりも先に到着していて、笑顔で迎えてくれました。彼女の笑顔と一生懸命な姿はその場を和ませてくれ、平仮名やカタカナ、簡単な挨拶などの練習もスムーズに進みました。段々意思疎通もできるようになり授業も盛り上がるようになりました。初めての授業が終わったときには、緊張や不安よりも、難民の方が少しずつ日本語を話せるようになっていく姿を見ることによる嬉しい気持ちや達成感の方が大きかったです。また、難民の方がいつも笑顔で「ありがとう」など覚えた日本語を使って言葉をかけてくれる事は物凄く嬉しかったです。

その後、二人の男性の難民の方が日本語の授業に参加して、現在は三人の方に日本語を教えています。三人それぞれ日本語の勉強の仕方や、得意不得意が異なるため、少しずつ授業の仕方を変えながら進めています。うまくいかないことも多数ありますが、工夫しているうちにいい方法が確立されることもあり、私自身楽しみながらボランティアをしています。

現在は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、オンラインで授業を行なっていますが、教科書を使いながらスピーキングを中心に練習をしていて、対面形式で行なっていた頃と比べて変わらないくらいスムーズに授業を進める事ができています。皆さん、おうち時間を日本語の勉強にあてているようで、授業の最初に日本語でその日のテーマに沿ってお話をしてもらおうと、前回よりもより多くの単語や文法を使って説明してくれ、彼らの日本語の上達を実感しています。

私はボランティア活動を通じてたくさんのことに気が付き、そして学びましたが、その中で一番大きく変わったと思う事は難民の方に対する考えです。ボランティアを始める前から難民についての話を聞き知識を深めるように努力していましたが、それらの知識は社会問題の中の「難民問題」として捉えた全体的なこと

であり、難民の方の一人一人のストーリー、経験、考えなどではありませんでした。

しかしボランティアとして実際に難民の方と接するうちに、皆さんの考えや価値観、優しさ、今までの経験、努力が見えてきて彼らの存在が身近に感じられるようになりました。何となく遠い存在だと感じていた難民の方達は私たち日本人と何ら変わりのない一人の人間であり、文化や価値観は違うかもしれませんが、それらを超えて親しくなれると強く感じました。

例えば、日本語の授業の時にそれぞれの国の食文化について話していると、意外と遠い国での食べ物が日本の食べ物と似ていることに気が付いたり、日本が他の国でどのような国だと思われているかなど、普段はなかなか知る機会のないことも学ぶことができます。また、決して恵まれているとは言えない状況下にあっても、将来の夢や目標を日本で実現させようとしている彼らの話にはいつもインスパイア(感化)されています。

私がボランティアを始めた時はまだ高校生で、特に専門知識があるわけではありませんでしたが、それでも難民の方のサポートを少しはできたと思います。自分のように特に大きな力があるような人間ではなくても、少しの勇気と熱意があれば誰かの助けになれるということを知り、大きな達成感を得ることができました。大学進学のため、この先今のように日本語のボランティアを続ける事は一時的に難しくなってしまいますが、自分の小さな行動でも難民の方の助けにはなるということを忘れずに、サポートを続けていきたいと思います。

.....

JELA では、今回ご紹介した塩野さんのように、難民や難民認定申請者に日本語を教えるボランティアを募集しています。これまでは日本語レッスンのボランティアという対面式で地域的な制限がありました。しかし、これを機に JELA から難民の方へのパソコンを貸し出し、オンラインでのレッスンも可能となりましたので、全国(さらには世界中!)の方にボランティアにご参加いただけます。特別な資格などは不要ですが、ボランティア登録には履歴書・面談(ルールの説明会)があります。皆様のお申し込みをお待ちしています。ご関心のある方は以下までご連絡ください。

Eメール: jela@jela.or.jp

電話: (03)3447-1521 (平日9:00~17:00)まで

2021年インド・ワークキャンプ募集中止と CRHPの新型コロナウイルス対策支援のお願い

世界中で新型コロナウイルス(COVID-19)感染症が拡大しています。JELA が子ども支援事業を行っているインドでも感染者数が増加し、世界で2番目(7月14日現在「日本経済新聞」調べ)となっています。

JELA では2021年2月に実施予定であった CRHP (Comprehensive Rural Health Project) でのインド・ワークキャンプの募集を行わないことになりました。皆様の安心と安全を考えての判断となりますが、参加を楽しみにしていた方々には申し訳なく思い、ご理解を感謝いたします。

キャンプ予定地であった CRHP は、インド中部のマハラシュトラ州ジャムケッド村にある病院を本拠地とした地域支援組織です。外務省とともに医療器具を寄付して以来、JELA とは20年ほどの関わりがあり、ワークキャンプは2005年から実施してきました。CRHP は、今回のコロナ禍にあって最も積極的に感染者の治療に従事してきた医療団体の一つです。

来年、JELA ではインド・ワークキャンプによる直接的なボランティア奉仕はできませんが、CRHP の行う新型コロナウイルス対策に対して支援をしていきたいと考えています。

インド政府によるロックダウンの中、CRHP では当初から施設内の病院を地域の濃厚接触者の隔離施設として提供し、その後も陽性患者の受け入れ及び治療を行ってきました。以下に、現地から届いた CRHP の新型コロナウイルス対策と支援の報告をご紹介します。

.....

・3度目となる COVID-19 隔離施設として病院(写真右・落成時)への受け入れ、これまで150人の陽性患者及び濃厚接触者を受け入れている。患者たちには5600食を提供。(6月上旬現在)
・ロックダウンが継続される中、スタッフとその家族37名と隣村86世帯のために食料や家庭用品を供給するための支援を募っている。

(1週間に必要な供給量は、野菜340キロと卵540個)

・ジャムケッドへの規制が緩和される際は、自治体と協力して、地域30村に向けて COVID-19 対策キャンペーンを実行し、高血圧や糖尿病を患っている村人へのサポートをする予定。
・貧困農家50件への種苗や肥料の供給支援を行う予定。
・COVID-19の影響で事業継続のための収入も底をついたため、COVID-19 対策事業のファンデレイジングキャンペーンを実行中。
.....

CRHP からは、以下の支援のリクエストを受けています。CRHP 支援にご協力いただけます方は、金額を問わずご寄付をいただけますと幸いです。

・患者へのサポート: 1人当たり181ドル(約2万円で陽性患者1人当たりの治療ができます)
・食料等供給: 一世帯(5人)当たり月65ドル(約7千円で一世帯へ1か月分の食料供給ができます)
・貧困農家へのサポート: 一世帯当たり33ドル(約4千円で貧困農家一世帯への経済支援ができます)

引き続き、皆様のお祈りとご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。





JELAは、2月12～22日の11日間「カンボジア・ワークキャンプ」を実施しました。全7名（参加者5名、引率2名）が無事に帰国することができました。お祈りくださった皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

カンボジアでは、現地のパートナー2団体（Life with Dignity=LWD、ルーテル教会カンボジア=LCC）の協力を得て、2つの小学校の外装補修のボランティア活動を行いました。また、小学校の子ども達と触れ合い、現地のルーテル教会の青年会や礼拝に参加するなど、現地の人々との交流も深めました。

学びの部分では、カンボジアの歴史と文化を知るために、キリングフィールド、拷問博物館、地雷博物館などを見学し、世界遺産アンコールワット遺跡を観光しました。キャンプに参加した5名の感想文の要約（JELAが抜粋し編集したもの）を掲載します。

参加者の感想全文は、JELA ニュースブログ（<https://jelanews.blogspot.com/search/label/ワークキャンプ>）に掲載しています。

世界平和のために

濱 夕美

今回のワークキャンプで子ども達と遊べたこと、子ども達の素敵なお笑いに触れたことなどボランティアで経験したことは、これからの私の人生で必要になるものだった。見学で行ったキリングフィールドやトゥールスレン（拷問博物館）が私

だけでなく世界にとって知られるべきだと考えた。

キリングフィールドではクメールルージュについての説明があり、アンカー（党）がナチスに似ているとおもひ、物心つかない子どもを拉致し、洗脳をし、同じ国の人を殺すために教育していることが恐ろしく、キャンプなどを使い楽しくユダヤ人が悪いという教育をされていたヒトラー・ユーゲントに似ていた。

お母さんが重労働のせいで夜しか赤ちゃんに乳をあげられず亡くしてしまったことを後悔しているというインタビューを聞き胸が締め付けられた。そして、キリングツリーで赤ちゃんを木に打ち付けて殺したことを聞き、どうして人間はそんな酷いことが出来るのかと考えさせられた。生存者のインタビューを聞き、どんな状況でも生きる希望を持っていることが大切だと知った。

私は、父が原爆を調べる研究者だ。母がアメリカの日系強制収容所を調べる研究者だ。その関係で、広島・長崎はもちろん、アウシュビッツ収容所にも行った。そして、今回、キリングフィールドとトゥールスレンを見学して、ピースボランティアに参加したくなった。また、カンボジアだけでなくインドネシアでも同時代に悲劇があったようなので、そういった歴史もどんどん学びたい。そして、世界で初めて原爆を落とされた国に生まれたので、今回、学んだこと、これからピースボランティアに参加して、世界の平和のために活動したい。

「伝える」ということ

吉田 汐里

「カンボジアは、こころが豊かな国。また、近年、発展してきている国。」これは、今回のワークキャンプに参加する前に抱いていたカンボジアのイメージである。私は、高校1年生の時に、高校が主催していたカンボジア研修旅行で、一度カンボジアを訪れたことがあるため、そのように感じていた。

ワークキャンプに参加して、そのイメージは都市部と一部の地域に過ぎないのだと分かった。例えば、仏教が一般的な宗教とされるカンボジアでは、イスラム教の地域は差別されている。そのため、その地域は道路がガタガタで、宗教による格差がみられる。

「このように平等な開発が進んでいないカンボジアに対し、自分は何ができるのだろう」と考えた。カンボジアの人が求めることとして現地の人がおっしゃっていたのは、農業の技術や英語を教えてくれる人である。そのことを知った時、自分の無力さを痛感した。今の私には農業の知識がなく、英語も苦手な上にクメール語は全く分からない。そんな私にできることは何か。考えた結果、直接的な支援についての答えは出ていないが、間接的にカンボジアの人のためにできることはあると考えた。それは、「伝える」ということである。カンボジアの現状について、知らない人達に伝えていくのである。

日本にいる多くの人はカンボジアについて知ることはないだろう。カンボジアの人のニーズを知らなければ、当然行動を起こすことはない。多くの人にカンボジアの現状を知ってもらい、それが支援に繋がって欲しいと考えた。未だに答えの出ていない、カンボジアへどのような直接的な支援ができるかについては、この「伝える」ということを通しながら考え続けていきたい。

何が本当の幸せなのか

梅津 幸奈

私はこの4月から教育学について学びます。そうした中で子どもへの支援に興味があり、今回カンボジアワークキャンプに参加しました。

今回のキャンプでは、現地の子どもたちと接する機会が多くありました。一緒に

遊んだり、散歩をした子どもたちの目は本当にキラキラしていました。また勉強することが好きだと感じ、自分から学ぼうとする姿勢の子どもも多かったです。今生きている瞬間を純粋に楽しみ、学べることを心から喜ぶ子どもばかりでした。

それに比べ、日本では人よりもスマートフォンの画面などに目を向けることが多く、勉強することに負の感情を持っている子どもが多いように感じます。そうした場面を目にすると、何が本当の幸せなのかという思いが私の心に浮かび上がりました。

現地の教育現場では、子どもの人数に対して教師の人数が少ないことに驚きました。それ以外の場所では、農業など生きていくために必要な知識や技術を次世代に伝えていく立場の人が少ないことです。そういった立場に今いる人たちが、これまでに十分な教育を受けてこれなかったことも一因ではあると思いますが、過去の出来事で多くの知識を持った人や教えるべき立場の年代の人が失われたことも大きな理由であると思います。こうした面でも、カンボジアは過去の出来事の後遺症を背負っているのだと知り悲しくなりました

折り紙を折りプレゼントしたり、手を繋ぎ散歩をしたり、鬼ごっこなどをして楽しんでた子どもたちの笑顔をこれから先も守っていきたいと感じました。そして子どもたちが満足できるような教育の環境を整えるための支援が必要であると思いました。

必死に勉強に励む子どもたち

村上 綺理人

私がカンボジアのボランティアワークキャンプで、ポル・ポト政権時の虐殺や地雷被害、十分な環境とは言えない学校の中で勉強する子供たち、生活するために必死に働いているカンボジアの人々について知ることができました。カンボジアという異国でのこれらの経験が、自分の人生観を180度変えることができたと思います。

ポル・ポト政権の残虐な政策や虐殺の記録を記念館で見たときは、現実から目を逸らしたくなるような、そして何でこのような事をしたんだ、という怒りの感情が私の脳を支配したような感じでした。拷

問博物館で、自分が当時の拷問を受けている身になって色々見て回りましたが、生きる希望が見えないような絶望感に襲われるほどの拷問時の写真や古びた留置場跡がありました。地雷博物館もそれに負けないくらい大変な惨事を扱っていて、地雷撤去のために今も必死に活動している活動があることに心を打たれました。

小学校を2件訪れましたが、どちらの学校も子どもたちがみんな元気で、私達のような初対面相手でも、笑顔で積極的に接してくれて、とても嬉しい気持ちになりました。日本とは違い、学校の設備も十分とは言えない環境の中で、必死に勉強に励む子どもたちを見ました。

日本の子供たちはやる勉強というよりやらさせる勉強をしている雰囲気が多い印象でしたが、カンボジアの子供たちはみんな自分で勉強をしたいという熱意が遠くでも見て分かりました。私たち日本人の多くは、今の日本の環境が恵まれているということに気付いていないんだなと思いました。

クリスチャンとしてできること

本間 いぶ紀

首都プノンペンで過ごした1週間、貧富の差を目の当たりにしました。街から車でほんの少し移動すると、舗装されていない道路や清潔な水を使うことのできない、女性や子どもが安心して暮らすことのできない環境がありました。

近年のカンボジア経済は高成長していますが、そこから弾かれた人々が多く存在することを実感しました。LWD(Life With Dignity)で聞いた話の中で「カンボジアの平等な開発」がいかに重要なことかを教えられました。その「カンボジアの平等な開発」をする上で、わたしたち日本人ができる支援は何だろうと考えたときに、現地で

活かすことのできる技術や知識の提供がすぐに思い浮かびました。しかし、それらはわたしのような技術も知識もお金もない大学生ができるものではありません。支援をしたいけど、難しい状況にもどかしくなりました。

そんな中でも、ひとりの人間として、クリスチャンとしてできることがありました。この現状を世の中の人に「知ってもらう」ことです。わたしは今回の渡航で、カンボジア国内の経済格差やポル・ポト政権が行った残虐な行為をこの目で見て深く知りました。「知る」「知らせる」ことで支援の輪が広がること、知らなくては何も始まらない、正しく知ることで正しい支援ができるのだと強く感じました。そして、今自分にできることをしたいです。



JELA 公式 SNS アカウントがオープン!

JELA の公式 SNS アカウントの運用が始まりました。SNS とはソーシャル・ネットワーキング・サービス (Social Networking Service=頭文字から「SNS」) の略称です。

これまで、JELA は公式ホームページ (<http://www.jela.or.jp>) などインターネットを媒介として情報を発信してまいりました

が、これからは SNS を有効活用し、より広く情報の発信と拡散をしていきたいと考えております。

以下が JELA の公式 SNS アカウントです。各種キャンプのお得なキャンペーンや、スタッフのこぼれ話なども発信していく予定です。皆さま、ぜひフォローして応援してください。どうぞよろしくお願いいたします。



Twitter
(@jelamission)



Instagram
(@jelamission)



Facebook
(@jela.workcamp)



LINE
(@431dlncf)

第 14 回川柳ひろば入選句発表!

次の三句が選ばれました(柏木哲夫選)。
今回はじめてビクターさんが最優秀に選ばれました。優秀賞のおかげさん、からくさるりさんをはじめの入選です。皆さん、おめでとうございます。

「川柳ひろば」では毎時作品を募集しています。件名に「川柳ひろば」と明記の上、JELA 事務局へ E メール (jela@jela.or.jp) もしくは、郵便でご投句ください。皆様の作品をお待ちしております。(川柳ひろば管理人 奈良部慎平)

<最優秀句>

☆残業の削減会議を残業で

(ビクター)

<優秀句>

☆聞こえない祈りにアーメン大丈夫?

(おかげ)

☆インドア派生活あまり変わらない

(からくさるり)

以下のような佳作もありました(川柳ひろば 管理人選、柳名略)

☆飼われてるペットに私は飼われてる

☆社交辞令「祈ってるよ」で多くない?

☆2M(めーとる)眼鏡を外せばあなただれ

☆テレワーク Web カメラで照れ仕事

編集後記

「私たちにできること、それは伝えること」広報担当職員が良い見出しをつけてくれました。カンボジアの今を知るワークキャンプや、コロナ禍における他国の衛生管理事情、自国の難民支援など、今回も JELA の事業へ積極的に参加して下さった方々の生の声によって紙面が完成しました。

人は、自分が生きる時代のある問題に関心を持った時点で歴史の生き証人となり、伝えた時に初めてその役割を果たすのだと常々思います。ある問題に関心を持ってその渦中に身を置いた人は、過去を振り返った時に、「今にして思えば」と自身を歴史の一部として、その事柄を語ることができるのです。

アウシュヴィッツにある博物館の入り口

には、「The one who does not remember the history is bound to live through it again. (歴史を心に刻まない者は必ずそれを繰り返すことになる)」という言葉が刻まれています。コロナ禍の影響下にあつて、私たちはこの後、目くるめくスピードで数多くの新しい「当たり前」に遭遇し、受け入れていくことになるでしょう。歴史が速度を増すように感じる今だからこそ、逆算するように今から過去へと歴史を遡って「心に刻む」ことは大切です。

再び自分たちの時代に戻り、それまでの神の介入の業も見る事が出来るからです。それをそのように伝える時、私たちは神が導く人類の歴史の生き証人としての役割も果たせるのかもしれませんが。(渡辺 薫)

支援者一覧

(2020 年 2 月 1 日～2020 年 5 月 31 日)

順不同・敬称略

秋吉英理子 / 浅野英公子 / 阿部光成 / 安藤裕三 / 安藤淑子 / 石澤とし子 / 泉真琴 / 一橋満留 / 市吉伸行 / 井藤育子 / 岩田啓美 / 梅津めぐみ / 宇山のぞみ / 太田立男 / 大嶺愛持・裸覇武・十六夜 / 大村則雄 / 岡恵美子 / 奥山信子 / 桶田和歌子 / 加藤まや / 木村富久子 / 熊田真衣 / 小泉小枝 / 河野悦子 / 小暮修也 / 小島拓人 / 酒井恵美子 / 佐々木裕子 / 佐藤たか子 / 佐野友美 / 白石恵 / 杉山美紀子 / 鈴木梨架 / 高橋要子 / 竹田美香 / 田中佳那恵 / 田中淑子 / 田山かほる / 塚田政司 / 辻裕子 / 寺澤陽子 / 遠山愛紗美 / 中山純郎 / 中山玲子 / 西垣親子 / 西立野園子 / 橋口保夫 / 原田裕子 / 春木イツ子 / 平田翔 / 藤野みち子 / 古川文江 / 古屋四朗 / 堀田則子 / ミード由香里 / 南節子 / 森保宏 / 森若奈 / 森下博司 / 森部信・榮子 / 八坂由貴子 / 山県順子 / 山口敏子 / 山口初子 / 山本了 / 若原奇美子 /

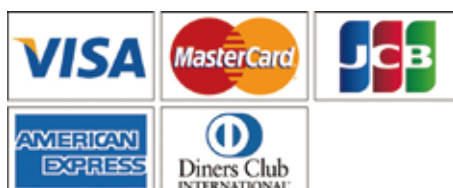
以上、ご支援ありがとうございます。

匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。



国連で合意された17のグローバル世界共通の目標を「SDGs(Sustainable Development Goals:エスディージーズ)」といいます。JELAはSDGsに賛同し、よりよい国際社会の実現に貢献しています。

JELAの活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードでご寄付いただけます!



Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26

Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523

Email: jela@jela.or.jp

HP:<http://www.jela.or.jp>

郵便振替口座番号:00140-0-669206

加入者名:一般社団法人日本福音ルーテル社団